新田開発と池溝の整備で
領国運営に心血注いだ水野父子

服部大池（はっとり）

元和５年（1619）、福島正則の改易により大和郡山から備後に転封された水野勝成は陸と海の両面の交通に優れた常興寺山に城郭を築き、城下町を福山と命名します。次に財政の補填政策として新田開発と農業用水の確保のために池溝の整備にとりかかりました。瀬戸内海沿岸でも特に少雨地域である福山は領内に 1800 の溜池を保持しています。これは水野氏の治世 80 年間、間断なく続けられた結果で、入府時 10 万石だった福山藩の石高も元禄時代には３万石増加となっています。

多くの溜池の中で備南最大の規模を誇るのが服部大池です。寛永 20 年（1643）､勝成は（この時隠居しており､子勝俊の代）築城に奉行として携わってより土木事業に識見と技量をもっていた神谷治部に築造を命じました。服部大池は前年に築造された春日池につぐ工事で、神谷は総奉行、領内９郡、240 カ所の百姓が動員され毎日数百名の人夫達で進められました。困難を極めた大事業も２年後の正保２年（1645）10 月に完成、近隣 20 カ所の田畑を潤したそうです。商人資本に期待せず、藩営で行われた治水・利水事業のためか、工事中は家老職以下、上級武士が月に数回も視察に訪れ、激励したそうです。

服部大池は福山市の西北、神石高原町との町境から南に流れる服部川をせき止めて造られました。服部川が神辺平野に流れ出たところのため、堰堤の長さはやや長くなりますが、貯水量が大きくなるため、池敷として最適と考えられたようです。周囲約４㎞、堤長約 200 m、現在の天端幅は 20 m程度ですが、これは築造後 300 余年の間に、幾度かの補修によって拡幅されたためです。

なかでも昭和初期の大改修では、堤防のかさ上げとともに余水吐の越流堤を延長し、東西２カ所にあった樋を統合して西樋の位置に取水塔が設けられました。ドーム型の屋根の上に風見鶏を取り付けた取水塔は池畔の桜と共に、大池のシンボルともなっています。

築造時、大変な難工事のため、水神さまの「人柱」となった十六歳のお糸の伝説にも彩られ、農林水産省のため池百選に選ばれた服部大池はかんがい用水として、また桜の名所として地域になくてはならない土木構造物です。

備後一かや　服部大池は　かあいやお糸が　人柱

■位置図

人柱お糸之碑

服部大池

田の中を走る水路